

令和5年度



# 鹿児島県の教育

10月号

## 巻頭言



### きらめきの少年期に 生きる源泉となる 原風景を

一般財団法人鹿児島県校長会館理事  
県連合校長協会中学校長部会副部会長

西 ゆかり  
始良市立蒲生中学校長

本校でも、学校経営方針の中にスローガンを設定した。「蒲生中の強みを生かし、きらめきの少年期に、生きる源泉となる 原風景を」である。この言葉は、今から二十年ほど前に講演会の中で金森俊朗先生が使われた言葉だ。

当時、いの中の授業についても勉強中だった私は、NHKスペシャル「涙と笑いのハッピークラス 四年一組命の授業」を観た。泣きながら観た。この番組は二〇〇三年第三十回日本賞グランプリをはじめ数々の賞を受賞したので、記憶されている方も多いことだろう。

国の第四期の教育振興基本計画では、二〇四〇年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成の必要性が示されている。将来の予測が困難なこれからの時代に、未来に向けて自らが社会の創り手となる子供を育成するには、何が必要なのか。そう考えたときに、二十年前の記憶が強い光を放つように思えた。いや、いかに時代が変わろうとも人が生きていく上で必要なことは何も変わっていないのかもしれない。

この夏に開催された「二〇二三かごしま総文」のいくつかの会場で、鹿児島県の高校生の活動の様子を見せていただいた。多くの高校生が「今日までの日々は大変だったけれど、

仲間と繋がることできて、素晴らしい体験ができた。」と誇らしげに語る姿に力をもらった気がした。高校生たちは、総文の企画から準備、当日の運営までの数年の間にお互い

と関わり合うことの積み重ねを通して、自分の将来を創り出していないかと思えた。仲間との確信したのではないかと思えた。仲間と議論し、認め合い、高め合いながらよりよいものを創り上げていく日々は、これからの人生を生きていく上での「豊かな源泉」となる「鮮やかな原風景」になったことだろう。子供は、子供の中で、子供と関わりながら育つ。学校での毎日の営みの中でお互いの願いや希望を共有し、痛みやつらさを共感しながら仲間と繋がっていきける、そんな人間関係づくりができればと思う。個性をいかした生き方を尊重し合う一方で、社会から必要とされる自己の役割を果たしていこうとする意識、他者と繋がりがながら社会を形成していく決意を育てたい。持続可能な社会の担い手となるために、まずは自分が生活している足元から学びや体験を重ねていくことの重要性を再認識した。

そして、子供たちだけでなく、これからの時代を生きる教師自身も、生きる源泉となる原風景を心に宿し続けていきたいものである。

## \* おもな内容 \*

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団法人校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		

表紙絵(桜島の絵) 10月号～2・3月号 吾平中学校 松下 幸男

令和5(2023)年 10月号

一般財団法人鹿児島県校長会館  
〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13  
振替 02030-1-3192  
TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷  
鹿児島市東坂元二丁目29-1  
TEL 247-1605 FAX 247-2844



『教員の働き方改革今昔』

元市成小学校長 安藤 薫

教員の働き方改革が問題となつている。そこで、自分の小・中学生時代から教員を退職するまでを振り返つてみた。戦後間もない小学生時代、放課後になると若い教師たちがテニスに興じている姿がよく見られた。学校近くの居住地から下校後学校へ再び遊びに行き、テニスのプレーを見たり、エアーボールの球拾いに走つたりした。また、保健室等で男女混じつて談笑している姿も見かけた。今になって思えば、多忙で追われる日々ではなかったのかもしれない。

中学生の頃も、戦後十年も経ていない時期で、ほとんどの教師が校区内の実家か下宿住まいであった。汽車通勤の教師もいたが、隣町の横川駅からという状況だった。部活といえば、野球用具一式が揃えられるような裕福な子の集まりの野球部と体育教師一人で指導するバレー部の二つしかなく、ほとんどの教師が勤務終了と同時に退庁していったようだった。口の悪い生徒はそういう教師を「帰宅部の顧問」と揶揄していた。中学卒業の頃は、NHKの志村正順氏のようなスポーツアナに憧れたが、卒業前に母までも亡くなり、伯母宅に兄弟引き取られ、高校には行かせてもらえな

普通高校ではあつたが、弟も在学中ということで、卒業後は就職を考えていた。

しかし、二度も就職試験に合格できず、普通高校には求人も少ないと言われ、高三の冬休みを迎えた。担任は市外から通学している私宅を何度も訪れ、母子家庭の伯母を説得し、大学進学を進めた。その結果、伯母もついに折れ、滑り止め受験なし、一番競争率の低い、そして学費も安い国立大学、寮や奨学金の手続きをする、家庭教師のアルバイトを探すという条件で、大学進学を許可し、伯母の条件をすべてクリアして学生生活を送ることになった。

卒業後は祖父が校長をしていたという種子島に赴任希望だったが、幸か不幸か郡部の大規模中学校に決まった。大学を終えたばかりで若かったし、教育実習で教師という職業に魅力を感じたので、長時間労働は苦にならなかった。空き時間や昼食休憩時間は、クラスの子に毎日提出させていた日記の点検とコメントの添え書きに追われ、ガリ版が学年に数個ずつしかないため、放課後の学級だよりや定期テストの問題作成は、先輩教師が終わるのを待つて使わせてもらった。印刷は用務員

略歴

昭和三十八年三月 鹿児島大学教育学部卒業  
昭和四十二年四月 始良郡加治木中学校教諭  
平成十三年 三月 輝北町立市成小学校長  
平成十九年 四月 湧水町立吉松幼稚園長  
平成三十年 四月 くりの図書館協議会長

が退庁してしまつた後、謄写版のインクで汚れながら一人ですることが多かった。また、国語を担当しており、長文読解の問題は、解答欄まで含めると、一人三枚にもなることがあり、テスト監督教師から嫌味を言われることもあった。理科や家庭科の担当者は解剖図や衣服の各部の名を答えさせるため、ガリ版で絵を描くのが大変だったようである。テスト終了後は生徒の苦情防止のため早く返却するようにし、そのため持ち帰り残業が多かった。独身だったし、学校に近いところに下宿していたので、家族持ち教師の宿直の依頼が殺到し、月の半分近くは宿直だった。家庭訪問時期は父親から最後の順にしてくれとの要望が多く、夜になって車で送ってもらうことになったが、二十年后同一校に勤務することになったら家庭訪問も様変わりしていた。外用の杉の葉を敷いたトイレがなく、五分か十分後になると遅れが生じ、時間年休を取ってきた母親から苦情を言われたりした。  
本当に教師を志す者には、長時間労働はさほど苦にならないと今でも思う。



## 確かな学力の育成に向けて

枕崎小(南) 森 章 郎

### 一 はじめに

本校は、薩摩半島の南端に位置し、南は広大な東シナ海を臨む景勝の地にある。平均気温は約十八度、年間降水量は平均二一〇〇ミリで温暖で多雨な地域である。校区の方々は、教育に対する関心が高く、学校行事等には積極的に協力していただいている。そして、本校は、明治六年に公立学校として創立され、今年度、百五十周年を迎える歴史と伝統のある学校である。現在、児童数は三百六十一人で特別支援学級五学級を含む十七学級で構成されている。

### 二 児童の実態

- 児童の実態は、次のようである。
- (一) 学習面では、NRTなどの結果から「活用を問う問題、自由記述の問題での誤答等が多い」「長文の読み取りや条件に沿って書くことが苦手」という結果が出ている。
  - (二) 生活面においては、「児童が元気で明るいあいさつをしてくれる」との地域の方々からお褒めの言葉を数多くいただいている。

### 三 学力向上の努力点及び具体策

#### (一) 知識及び技能の習得

授業における共通実践事項の徹底を図る。特に、めあて、まとめの板書の際は、相互に必然性のあるめあての設定を重視したものとす。

#### (二) 思考力・判断力・表現力等の育成

- ア 書く活動では一人思考の時間確保をして、自分の考えをしっかりとめさせる。
- イ 説明する活動では、三角ロジックやペンタゴンロジックを取り入れた、深い学びへの手順による意見の交流を行わせる。

その際、職員から「話合いの視点の持たせ方が難しいこと」が出された。そこで、目的をしっかりとつかませた上で話合いに移らせることを助言した。

ウ 本時の学習を確かなものにするために児童の習熟に応じたポストテストを実施する。

エ 自分の学びを振り返る。板書や振り返りカードを使って、分かったことなどを振り返らせる。その際に職員から、「どのような視点を与えたら効果的である

#### (三) 学習習慣の確立及び小中連携教育推進

か」と質問された。そこで、分かったことや思ったこと、できるようにしたこと、生かせること、友達の考えから参考になったことなどがあることを助言した。

学習のしつけ(特に聞く態度)や週末課題、うちどく(家庭での読書)がある。

#### 自己有用感の育成

#### 「挑戦」をキーワードに

全国学力・学習状況調査の児童質問紙で、「自分にはよいところがある」と思っている児童が二十九・九%(全国四十二・六%)である。そこで、学校生活のいろいろな場面で成功体験を積ませたいと考えた。

二期の始業式に全校児童に頑張ることとして「挑戦」という言葉を掲げ、いろいろなことに意欲的に取り組んで、できることを増やしていこうと話した。「本をいっぱい読みたい。」「ボールを遠くまで投げられるようになりたい。」「など、まずは簡単なことからできるようになり、自己有用感を高めることが、学力向上につながっていくのではないかと考えている。

#### 五 おわりに

市の研究協力校(小中連携)を受け、来年度の公開に向け日々全員で研究に努めている職員の姿から、各自がチーム枕崎小の一員であるという自覚と誇りを強く感じるとともに、とても頼もしく思っている。今後も本校の課題である児童の確かな学力の育成に向けて、校長として精一杯努力していきたい。



## 複式学級における組織的な授業改善

母間小(大) 山本 克久

### 一 本県・本町の現状

近年、人口減少による過疎化・少子化などの要因により、県内各地において児童数の減少が顕著に現れてきていることは否めない。

また、本県は、大小様々な離島を所有し、小規模・極小規模校に該当する小学校も少なくない。令和四年五月一日現在、県内には複式学級を有する小学校が二二九校、複式学級四九一学級が設置されている。本校が設置されている徳之島町においても、小学校八校中、六校は複式学級を保有している。

今回、本誌において提言を行うにあたり、複式授業における授業形態の試行や指導力の向上など、工夫・改善に向けて実践していることを述べたいと思う。

### 二 組織的な授業改善に向けて

#### (一) 複式双方向型の遠隔合同授業

複式学級を有する二つの学校同士をオンラインで繋ぎ、両校の担任がそれぞれ一年を主として授業を行うICTの利活用による授業改善である。これにより、複式特有の「ずらし」や「わたり」を必要とせず、単式学級の授業の形態が可能となる。現在、

教育現場において高速でのネット回線が整備されていることを考慮すると、様々な地域で実現可能な授業構想であろう。多様な考えに接する機会や対話的で深い学びへの広がりなど、学校の枠を越えた授業実践を推進していくべきである。同時に、これまですて実施している近隣校との直接交流活動も人間関係づくりの視点から継続していくべきだと考える。加えて、日常からの定期的な遠隔交流(朝の会、クラス紹介など)の実施も大切にしていきたい。ただ、授業担任投影用や相手校児童投影用など複数のモニター・端末の整備やオンライン接続までの操作の簡素化など、誰でも試行できるハード面の充実、さらに、遠隔合同授業における協働的な学びの実現、単式学級の授業での評価の見取りなど、研究・実践を深めていく必要性はある。

#### (二) 複式授業における質の向上

(一)で述べた「複式双方向型の遠隔合同授業」は、ハード面が充実したとしても、毎時間実現可能な改善策にはなり得ない。それは、各学校での行事や特色ある活動など、

それぞれ独自の教育課程があり、教科の進度を全て合わせることは不可能であるから。遠隔合同授業は、あくまでも、学びの広がり、思考の深まりに効果的な単元等における授業改善である。また、各校の担任が皆、複式経験者であるわけではない。むしろ、初めて担任する方が多い。各学校、職員数が少なく、自校の研修だけでは複式の授業力向上に課題も出てくる。そこで、毎学期、近隣校とオンラインによる合同研究推進委員会や合同職員研修、担任間による単元精選の話し合いなど、学校の枠を越えた研修を実施している。さらに、長期休業中を利用した直接交流での合同研修会や遠隔合同授業の指導計画づくりも実施し、複式指導の質の向上に努めている。

#### (三) 近隣校における校内体制の統一化

ア 遠隔合同授業や遠隔交流の時間帯が調整しやすいよう、校時表を統一する。

イ 複式指導モデルを策定し、基本的な学習過程を共通実践する。

ウ 画面やマイクを通して遠隔合同授業における発表方法や学習規律を整える。

エ 実践した単元や教材を次年度の指導計画に位置付け、持続可能な取組とする。

### 三 「最先端の学びの町」を目指して

今回の実践例及び提言が、近隣の学校と連携した学校経営の参考になれば幸いである。これからも、多様で独創的な学校経営に挑戦していきたい。



## 「串小プライド」の醸成を目指した

### 勢いのある学校づくり

串木野小(日) 常山 隆 治

#### 一 はじめに

本校区は、九州の大動脈としての国道三号線、JR鹿児島本線が中央部を通り、商業や産業の主要地として栄えている。また、西は東シナ海に面し、北には日本有数の歴史を誇る串木野鉾山を有するなど、海・山・川の自然にも恵まれている。優れた人材を輩出した地域でもあり、歴史と伝統に誇りを持ち、教育に関心と理解が深い。

#### 二 学校経営の基本方針

学校教育目標を「ふるさとを愛し、心豊かでたくましく、自ら学ぶ串木野の子の育成」と掲げている。キャッチワード「串小プライド(自律の心、協調・礼節の心、生命・人権尊重の心)」の育成を目指すために、未来指向の清新かつ活気と創造性に満ちた「勢いのある学校づくり」を、信頼で結ばれた職員の総合力・結集力をもって推進している。

#### 三 目標実現に向けた具体策

##### (一) 自律の心の育成(よく考える子ども)

校内研修のテーマを「児童の思考力・表現力等を高める効果的な指導法の工夫」教師のICT活用力及びICT指導力の向上を目指して」と掲げ、学習者主体の学び

に向けた授業改善に努めている。

具体的には、ICT機器及び教育向けアプリケーションソフトの操作方法や効果的な活用方法の習得、児童の発達段階を考慮して系統立てた情報モラルやパソコンスキルの適切な指導方法の確立に取り組んでいる。研修で得た学びから、学年部で授業実践案を作成し、「みんなで学ぶ楽しさ」を実感させることで、指導力の向上につなげている。

##### (二) 協調、礼節の心の育成(明るく素直な子ども)

コミュニケーション力育成に最も大切なことは「あいさつ」であり、本年度のアクションプラン「当たり前三か条の一つ」に位置付けている。この具現化に向けて、協働体制が構築されている地域の力も活用しながら、充実させることとした。

学校・家庭・地域が一体となり推進するに当たっては、学校運営協議会の力が不可欠と考え、校長の思いや願いを学校運営協議会で示した。様々な意見や協議を重ね、キャッチフレーズを「先手あいさつ」と掲げ、学校の願いや目的、保護者の家庭

での子どもとの向き合い方、地域の皆様へのお願いの三部構成のチラシを作成し、これから推進を図るところである。

##### (三) 生命・人権尊重の心の育成(がんばる子ども)

心身ともにたくましく健やかに伸びる児童の育成を目指し、教科体育におけるなわとび運動などの全校体制共通実践、養護教諭・栄養教諭の授業参画による健康教育の充実に努めている。

特に、知育・徳育・体育の基盤となる食育については、給食の準備や配膳などの様子を管理職が毎日参観しながら、児童や職員を意識の高揚に努めている。

また、人権意識・人権感覚を基盤に、一人一人の実態に応じた声かけや支援、ただすべきところは「言葉で諭し善導する教育」を展開しながら「居場所づくり」に努め、学校風土を築いている。

#### 四 おわりに

校長室には、本校出身である第二十二代文部大臣「長谷場純孝」の書画が飾ってある。創立百三十七年の歴史を受け継ぎ繋いでいく責任の重みを感じている。子どもが主役となり、みんなで学び、高め合い、協力しながら創造していくこと、その達成感を味わうことができるように、全職員が関わり続けることが大切である。

学校と家庭が協力し、地域の方々に支えられながら、これからの時代を生きる児童の育成に向け尽力したい。



## 自ら学び、共に歩み、

## 未来を拓く生徒の育成

城ヶ丘中(大) 吉 永 美 利

### 一 はじめに

本校は、鹿児島市から南に約五五〇キロの沖永良部島の中央部に位置し、北は東シナ海南は太平洋に面し、中央は海拔一八八メートルの越山を中心とする丘陵地帯で、サトウキビ、ジャガイモ、エラブユリなどの栽培や畜産が盛んである。

生徒数四十二名、各学年一学級と特別支援二学級、職員数十五名の小規模校で、地域・保護者の教育への関心は高く、常に温かい御支援をいただいている。

### 二 本校の取組

#### (一) 自ら学ぶ生徒の育成

生徒は、素直で明るく一生懸命授業に取り組むので、各種検査では、全国・県平均を超える教科が多い。

しかし、主体的な学習態度に課題が見られたので、一人一研究授業を通じた授業改善に取り組むことで、自ら学ぶ生徒の育成に努めている。

教師が教え過ぎたり、しゃべり過ぎたりしないように気を付け、じっくり考えたり生徒同士で教え合ったりする時間を確保

し、分かったことやできるようになったこと、新たな疑問などを自分の言葉でまとめ、家庭学習や次の授業につなげるという授業イメージを全員で共有し、職員一丸となって取り組んでいる。

また、毎週木曜日の朝二〇分間、学び方を学ぶスタディーチャレンジの時間を設定したり、帰りの会で、宿題の他に取り組む自主的な勉強を考えさせる時間を設定したりといった取組も進めている。

#### (二) 共に歩む教育活動

沖永良部の基幹産業の一つであるサトウキビ栽培に取り組み、植え付けから収穫まで、地域・保護者の方々と共に汗を流し、楽しく充実した時間を過ごしている。

また、琉球北山王の弟で沖永良部を統治していた世の主の墓やゆかりの地を歩く世の主ロード巡り、伝統芸能の三味線や昔話を方言で語るマンガタイなど、郷土の歴史や文化、産業について学び、先人の教えや自然の恵みを受け継ぎ、守り育てていこうとする態度を育てるために、学校・家庭・地域が連携し、共に歩む教育活動を進めて

#### (三) 未来を拓く生徒の育成

生徒が、将来、社会に出たときに自分の力で生きていくための基礎を身に付けさせるために、進路指導に力を入れている。

生徒にとって、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりして、自己評価を行うとともに、主体的に学びに向かう力を育み、自己実現につなげるものとして、教師にとっては、生徒の記述をもとに対話的にかかわることで、生徒の成長を促し、系統的な支援に役立てるものとして、キャリア・パスポートの意図的・計画的な活用を進めている。

また、進路選択や望ましい勤労観・職業観を培うために、卒業生や社会人を招いての講話や職場体験学習などを実施し、未来を拓く生徒の育成に努めている。

### 三 おわりに

本校教育目標「自ら学び、共に歩み、未来を拓く生徒の育成」の具現化に向けた取組を簡単に紹介させていただいた。

目標達成の第一歩は、目標の共有化であると考え、四月に赴任して以来、生徒にも職員にも、教育目標を覚えて言えるようになり、呼びかけてきた。職員は全員言えるようになり、生徒は、半分くらいである。

これからも同じことを言い続け、一つ一つの取組を丁寧に地道に進める経営に努めていきたい。



## 真の光を放つ「あいさつ」「そろえる」

### 「ルービツクキューブ」

国分南小(始伊) 上唐湊 司

#### 一 はじめに

本校は県本土のほぼ中央部、霧島市の南東部に位置している。学校の周りは田畑が多く、国分海浜公園や上野原縄文の森も含まれ、近くを検校川が流れるなど、自然にとっても恵まれている。

本校の学校教育目標を今年度から新たに「生き抜く力の育成」と設定した。その具現化を目指して、家庭や地域と連携しながら教育活動の充実に向けて取り組んでいる。

#### 二 本校の特色

「凡事徹底」をキーワードに「徹底」とは、教師の本気さが子供や保護者に伝わり、そこまでやるかというくらいにとことんやることとして、全職員で共通理解している。加えて、凡事徹底の大きな二つの柱として、「あいさつ」と「そろえる」に取り組んでいる。

#### 三 子供が輝く取組

##### (一) 「あいさつ」日本一の取組

「生き抜く力」を育む特色ある教育活動としてあいさつ運動を推進している。めざす子供像も「礼儀正しくやさしい心をもつ子供」と位置付けている。「あいての目を、見て、いつも笑顔で、さきにあいさつを、つづけよう」を合言葉に、あいさつ日本一

の学校を目指している。

昨年度から霧島市のあいさつ運動事業の推進校の指定を受けている。あいさつ日本一の幟や襷を新調して、子供たちの士気を高めている。

また、児童会で話し合った結果、毎朝自主的に校門の前に立って、ボランテアによるあいさつ運動の取組を行っている。今後は、あいさつ名人を昼の放送で紹介したり、全校児童を対象にあいさつアンケートを実施したりして、あいさつ運動の充実を図る予定である。

##### (二) 物・行動・心を「そろえる」の取組

物をそろえる(履き物をそろえる、かかとをそろえる)、心をそろえる(時間厳守、はさみ運動)、行動をそろえる(無言移動、無言清掃)の推進は、少なからず人間関係形成の能力や社会形成能力の育成の一助ととらえることができる。つまり、「そろえる」行動の形成によって、相手の意見を聴き、友達と協働して取り組む姿がみられる。児童会で、はさみ運動(走らない・騒がない・右側通行)を達成するために話し合いを行い、その方策として、ポスターを作成し、校内に掲示している。また、あいさつ

運動の活性化を図るために給食時間の校内放送で児童への働きかけを行っている。

加えて、履き物・かかとをそろえる運動については、児童会でクラス毎にチェックして、そろっていた学級にはがんばり大賞を贈呈して、子供たちの士気を高める取組を行っている。

##### (三) ルービツクキューブによる学びの醸成

赴任して校長室にルービツクキューブコーナーを設置した。校長室をサロン感覚で全面開放した。現在、時代は第三次ブームが再燃しているようだ。

攻略するには、思考・判断・知識・技能・忍耐等の様々な力が必要なことから、挫折する子供も多い。暫くは完成する子供がいなかったが、凡事徹底の大切さやストラテジーを教え導くことで、今ではわずか二十秒で六面をそろえる子供が出現した。

必死に思考し、戦術・戦力をもって六面完全制覇し、その先にある達成感・成就感を感じ得ているその子供たちの偉容に、深く心を打たれる。真の光り放つキュービストたちの今後の進化が楽しみである。

#### 四 おわりに

気持ちのよいあいさつは、人と人との心のつながりを深める魔法の言葉である。物をそろえると行動がそろい、行動がそろうと心がそろってくる。本校の「あいさつ」と「そろえる」の充実は、子供たちの豊かな心の醸成に繋がると強く考える。今後も、「あいさつ」や「そろえる」をはじめとする凡事徹底を通して、さらに「生き抜く力」を育んでいきたい。

「あいさつ・そろえる革命」宣言  
あいさつ・そろえるの力で、今を変える



## 地域資源の活用で学校活性化を目ざして

大島北高 松 本 勇 二

### 一 はじめに

本校は、奄美大島北部の奄美市笠利町に位置し、各学年普通科一学級、情報処理科一学級、計六学級、総生徒数百三十四人の小規模校である。昭和二十四年、大島郡笠利村立実業高等学校を前身として開校し、本年度、創立七十五周年を迎えた。「自主好学の精神」「敬愛和協の態度」「積極敢為の気迫」を校訓とし、「一人一人が主役」をスローガンに掲げ、生徒一人一人の資質の向上、自己肯定感の高揚に取り組んでいる。

### 二 取組の概要

#### (一) 総合的な探究の時間（アマンダ）

本校では、新学習指導要領改訂移行期間の令和元年度から先行実施し、一学年から三学年にかけて、系統的な探究活動を進めてきた。固有な見方・考え方を働かせ、自己の在り方・生き方を考え、より良く課題を発見し、解決していくための資質・能力の育成を目標とし、各学年、次のような取組を行っている。

#### ア 一学年

「奄美を深く知る」をテーマに、地域

の文化や自然、産業等について、有識者の講演や地場産業見学等を行う。

#### イ 二学年（第一サイクル）

一学年時の学習を基に、農業・食・自然・環境・伝統・文化等の各分野について、グループごとに探究活動の課題を設定し、その後、フィールドワーク等の探究活動を行い、情報収集や資料作成を経て、中間発表を実施する。

#### ウ 三学年（第二サイクル）

第一サイクルで生じた新たな課題について探究し、最終的な成果をまとめ、各グループが各々分担し合って成果を発表し、その後、報告書を作成する。

本年度の成果発表会は、本校生徒以外にも、探究活動に携わった地域の有識者、隣の中学校の先生方等約四十人の来賓、並びに、本年度指定を受けた「魅力ある県立高校づくりプロジェクト」の一環として、古仁屋高校の一年生にも参観いただいた。発表後の質疑応答も盛況で、発表した三年生も、緊張感の中、無事やり遂げたという達成感に満ちあふれていた。

### (二) 聞き書きサークル活動

この活動は、高校生が地元の高齢者や名人宅を訪問し、地域の文化や昔の生活の話を聞き、それを文章に起こす活動で、平成二十六年、本校OBの元奄美博物館長中山清美先生の呼びかけで始まり、本年度で十年目を迎えた。北大島地区の貴重な文化遺産を後世に受け継ぐ地域課題解決型の文化継承活動として高く評価されている。聞き取りは、有志により夏休みに行われ、その後文章に起こし、冊子を作成したり、デジタルストーリーテリングの手法を使って、ホームページに掲載したりしている。本年度は、奄美群島本土復帰七〇周年ということもあり、笠利町八地区において、戦時中から本土復帰までの状況を中心に聞き取りが行われた。生徒たちは、話者の当時の経験に触れ、古き時代を回顧するとともに、現代の課題に気付く機会となっている。

### 三 おわりに

このように、本校では人的・物的地域資源を活用し、探究活動や文化継承活動を実施している。生徒の中には、内容を発展させて各種コンクールに応募したり、進路決定の試験等において、活動実績として自己PR等に繋がったりしている。また、中学時代不登校傾向の生徒が、活動を通して自己肯定感を取り戻し、改善した事例もあるなど、好結果を生み出している。

今後も、地域との繋がりを広げ、生徒の活躍の場を実現していきたい。





声は空気の振動ですよ！

里小(北) 永野 俊也

当たり前の物理学の法則をなぜ？と思うかもしれませんが。ただこの言葉を聞いてピンとくる方がいるのではないのでしょうか。

私はもともと音楽教師ですが、そのスタートは高校二年の夏休みと、とても遅く、音符も読めず、ピアノも習ったことのない状況から始まりました。高校の音楽の先生に連れられて、当時鹿児島大学で教鞭をとっておられた有馬万里代先生の自宅を訪ね、音楽を志すこととなりました。音楽に携わりたい一心での選択でしたが、音楽とは私自身想定外で、何も能力や才能があったわけではありません。実際、中学校の教科書ですら音域が足りず、ともに歌えず、声質も先生曰く「だみ声の悪声」で、さらには、レ

ッスンの中でも、「ここ数年來あなたのように酷い人は見たことがない。」と評され、何度も破門の危機を経験しました。

「声は空気の振動ですよ！」と、大自然の法則の理に則り、人の無駄な考えや力みを廃し、音楽に本当に必要な体の使い方と、それを制御する考え方、精神性など厳しく指導を受けました。そのスケールの大きい指導の中で、音楽と向き合う時間を過ごし、また先生も見放すことなく粘り強く指導してください、そのおかげでなんとか音大に進学し、今に至っています。

先生は後に、「声がよかつたり、才能がある子は、ある意味誰が教えても伸びていきます。誰もがさじを投げるような子を導いてこそ、ようやく教師と言えるのでは・・。」そう笑顔で話されていました。教師となつてからは、専門外の吹奏楽も「同じ音楽、すべては空気の振動」と向き合いました。そして、赴任した学校のスタートは、なぜかことごとく教育困難校でしたが、これを「音楽で立て直す。」と、前向きに動けたのも、先生の教えを受けてのことであつたように思います。私がどれだけのことができなかつたか分かりません。ただ今は、九十歳を過ぎた今でも、後進の指導を精力的に行っている先生の姿を見るにあたり、私もそういう教師でありたいと思っています。

小さな蕾が満開の花となるように

森山小(隅) 富吉 省子

「捨てられて まだ咲く花の 哀れさに

また取り上げて 水を与えん」

教育実習も後わずかで終了というある日。教頭先生に、校長室に行くようにと声を掛けられました。叱られるのではと、生きた心地もしないまま校長室の扉を開けると、そこには柔和なお顔の校長先生が待つていてくださった。

「実習は長かったか。短かったか。」

と尋ねられたので、正直に答えると、大笑いしながら、

「先生は長く感じたか。でもね、子どもたちにとって、この時間は一瞬、今しかない。」

と、教えてくださったのが文頭の歌だ。『捨てられてる花の中に、これからきつと咲くはずの小さな蕾を見つけた。感慨深い気持ちになり、拾い上げて水を与えた。』子どもたちは、学校生活の中でいろいろな表情を見せてくれるが、その笑顔の裏には家庭や友達関係等、先生にはまだ見せない思いがあるかもしれない。『こんな子だ。』ではなく『ほかにどんな表情をもっているのだろう。』と、先生自身がわくわくしながら、子どもの思いを、子どもの力を、拾い上げてほしい。子どもが勇気をもてないとき

は、先生がそつと背中を押してあげてほしい。子どもの今は、今しかない。その貴重な時間を大切に使い、その子のもつ秘めた力と自信の花を、満開に咲かせてあげられる、そんな先生になってほしい。」

「出会った子どもたちに、満開の花を咲かせてあげられたかな。」

私の心の中で、今も温み、励ましてくれる歌として生き続けている。



まあ、やってん

坊津学園(南) 本山 和仁

三十代前半頃だったろうか。以前勤務していた学校で、ある先輩に言われた言葉が今でも心に残っている。具体的には覚えていないが、何か研究だったか企画だったか、どうすればよいか迷っていたとき、先輩に相談してみた。すると、その先輩から「まあ、やってん」(まあやってみたらいいんじゃないか)というアドバイスをもらった。確かあれは、電停で電車を待っていたときだった。短い言葉ではあったが、今でもそれは、言葉とともにその場所もよく覚えているほど印象に残っている。

当時の私は、結構、慎重になりすぎて、動けないことが多かった。その私にとつてその言葉は、シンプルではあったが、後押しをもらった言葉だったと今でも感謝している。

もちろん、綿密に計画して進めることも大事だが、良いと思ったことは、前進させないと次へつながらないことも多い。実際に動いてから、うまくいかなかったら修正する。いろいろなことを想定して、立案することは大事だが、案外動いてみないとわからないことも多い。いろいろな人が協力してくれたり、後押ししてくれたりすることも多い。やってみて考えることの大事に気付かせてもらったように思う。

その時から、やれるかもと思ったことは、以前に比べるとやってみたい、提案してみたりするように なって きた ように 思う。

そして、このことは、職員がアイディアを持つてきたときにも言えることだと思っている。良いと思つて前進しようとして提案してきたことは、極力させてやろうと思う。もちろん、多少の助言はするが、子どもたちにマイナスでなければ、思い切つて実行させることで職員も考えるようになり、達成感も感じる。そして、それが次に繋がるのではないだろうか。

校長としても、判断に迫られることが多い。普段の常識に囚われることなく、吟味はするけれども、周りの人と連携して、一歩ずつでも前

進していきたいと思つている。



「みんなファミリーだから」

鹿児島商業高 堀之内 尚 郎

「みんなファミリーだから」の言葉は、以前、勤務していた職場で、先輩に言われた一言である。当時、携わっていた業務は、学校や市町村を巻き込み、県民から注目を集める仕事であった。対外的な仕事が多く、朝早くから夜遅くまでの勤務は当たり前、それぞれが自分の仕事を抱え込んでいた。そのような時に、先輩から「職場にいる人はみんなファミリーだから、自分に時間がある時は周りの人を手伝つてあげればいいし、自分が忙しい時は手伝つてもらえばいい。」と言われた。なんだか救われたような気がした。

現在の学校の業務は分業化し、それぞれの裁量で進めることができる一方で、周りに相談したり、協力をお願いしたりすることは言い出しにくい面がある。また、人によっては、家庭的な事情を抱えている場合もある。例えば、親や家族の介護をしている方、病氣治療中や育児中の方など、人生の中で多忙な時期を迎え、悩ん

だり、迷ったり、どうしていいか周りに相談できない方もいる。裁量が任された業務と様々な事情が重なればストレスとなり、体調を崩して仕事どころではなくなるケースもある。

以前の職場では、この言葉をきっかけに周りの人の仕事がどうなっているのかそれぞれが関心を持つようになり、忙しい時は手伝うような心がけ、自分の仕事についても周りに気軽にお願いする雰囲気になった。この言葉をきっかけに、職場の雰囲気が大きく変わったのである。全員で業務に取り組むという意識が高まり、自分の仕事と周りの人の仕事をトータルで考えるようになった。結果として、協体制度が整い業務がスケジュールどおりに進み、全員が以前より早帰りができるようになった。

今や学校の業務改善は大きなテーマとなっている。増加し続ける業務にどのように対応していくのか、なかなか有効な手立ては見つからない。周りとのつながりを意識させる不思議な言葉「みんなファミリーだから」は、今こそ必要な言葉ではないだろうか。



## ある日の校長講話



### なぜ勉強するのか

米ノ津東小(北) 大原 暁 子

六年生の方がこんなことを質問してきました。

「勉強しないと、大人になってから困るよ」って言われるけど、分数のかけ算やわり算ができてなくても将来困ることはないし、計算も漢字もネットで検索すればすぐに答えが出てくるのに、どうして勉強しなくちゃいけないんですか」「なぜ勉強するのか」、私も、子供の頃から何度も考えたことがあります。その答えは、「ない」。・・・ではなく、「数え切れないくらいたくさんある」ということです。今日は、そのうちの一つについてお話します。

勉強する理由。その一つは「自分を幸せにし、まわりの人のことも幸せにするため」です。

例えば、自分でなりたい職業を選んで、その仕事でお金を稼ぎ、食べたいものを食べたり、欲しいものを買ったり、行きたいところに行ったりするなど、自分が思うような生活を送ることが幸せだと思う人なら、その職業に関する専門的な「知識や技能」を身に付けたり、資格を取ったりするために勉強は欠かせませんね。

また、分からないことをネットで調べるとしても、調べるための言葉や書かれている内容を理解する力、情報を整理して選んだりまとめた力が必要になります。

このような力は、何か困ったことが起こったときに、それを解決していくために必要な「しっかりと考え抜いて判断する力や分かりやすく伝える力」などにもつながります。そして、これは、問題が起きたときにだけ役立つ力ではなく、毎日の生活をもっと面白くしたり、世の中の道具や仕組みをもっと便利にしたりすることにも大いに発揮できる力です。この力を発揮することができるのであれば、まわりの人を幸せにすることができるといえるでしょうし、自分ももっと幸せになれるのではないのでしょうか。

さあ、皆さんが今やっている勉強の中にも、自分やみんなの幸せにつながるものがたくさんありますよ。ぜひ、探してみてください。

## 八月一日出校日

### 平和について考えよう

菱刈小(始伊) 田 口 太 介

今日は久しぶりの登校でしたね。朝すっきりと起きることができましたか。

さて、今日は皆さんに平和について考えてもらいたいと思います。低学年の皆さんには少し難しい話になるかもしれませんが、頑張つて、最後までお話を聞いて、平和ということについて考えてくださいね。

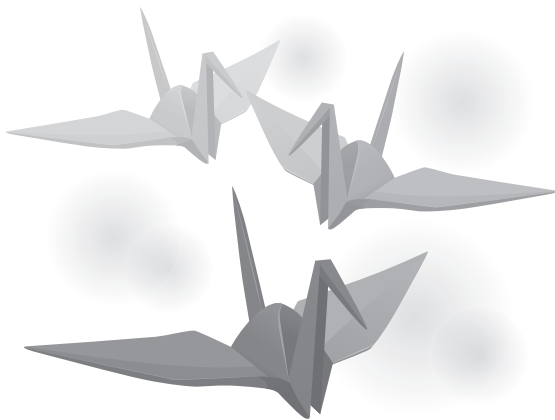
今日は八月一日ですが、八月六日、八月九日、八月十五日が、それぞれ何の日か分かりますか。八月十五日は、今年で七十八回目となる「終戦記念日」です。そして、七十八年前の八月六日は広島に、九日は長崎に原子爆弾が投下され、多くの方々の命が奪われた日です。

この戦争では、世界中の多くの方々の命が奪われたのですが、日本においても多くの方々の命が失われました。そして、私たちの住んでいる鹿児島の方にある沖縄では、そこに住んでいる人たちをも巻き込んだ、大きな、激しい戦いがあり、二十万人とも言われる方々の命が失われました。当時の沖縄に住んでいらつしやる方々の四人に一人の方の命が奪われたことになるそうです。そんな悲惨で・悲しくて・悔し

くて・辛くてたまらない戦争なのですが、今も世界のあちこちで起きています。皆さんの中にもニュースで知っている人も多いと思います。今日は、その沖縄で開かれた平和を願う式典の中で、小学校二年生が書いて、朗読した詩を紹介しますね。では、読みます。

#### ※朗読による詩の紹介

七十八年という長い時間が流れ、遠い昔の出来事になってしまいがちです。ですが、その戦争が「未来」のことにならないよう、わたしも含めて児童の皆さんも、戦争を絶対に起こしてはならないものであること、そして戦争のない未来をつくっていくためのことを、これからも考え続けていきましょう。



## 心をきれいにする体の使い方

大黒小(隅) 向 吉 晴 美

みなさん、この花を見たことがありますか。名前を知っていますか。自宅から学校までの道路の途中に咲いていました。見たことがない花だったので調べてみました。スマホのグーグルアプリにこのようなカメラ機能があります。これを使って写真を撮って検索したら、「サルビア・ガラニチカ」という名前でした。私が小学生の頃は、わからない花があつたら植物図鑑で調べていましたが、今は写真を撮るだけですぐにわかるから便利ですよ。

今日は、心と体について話をしたいと思います。皆さんに質問です。目は、花を見付けたら、本を読んだりするときに使います。では、耳は、どんなときに使いますか。私たちの口、目などの体は、他にも使い方があります。それは「心をきれいにする使い方」です。「心をきれいにする使い方」をまとめた言葉があります。腰塚勇人さんの「五つの誓い」という言葉です。その言葉を紹介します。

一つめ、「口は人を励ます言葉や感謝の言葉を言うために使おう」「励ます」という意味は、元気のないお友達を「がんばつてとか大丈夫だよ」と応援することです。感謝は「ありがとう」という意味です。

二つめ、「目は人のよいところを見るために使おう」

三つめ、「耳は人の言葉を最後まで聴いてあげるために使おう」

四つめ、「手足は人を助けるために使おう」

五つめ、「心は人の痛みがわかるために使おう」

大黒小の子供たちは、二〇人と人数は少ないけれど、とつても元気で明るく、全員がきょうだいのように仲がよいと思っています。でも少し言葉遣いが気になります。お友達に向かって言う、ちくちくことばが気になります。そんなとき私は、「もつとききれいなことばを遣えばいいのに、もつと周りにやさしくできたらいいの」と思ったので、今日は「五つの誓い」を紹介しました。六月は、校内人権月間です。心と体を使って周りのお友達、先生方、家族にやさしくしてくださいね。



# 話のひろば

## 先人の功績をひもとき

### 語り継ぐ大切さ

神山小(隅)

前原 貴士

「汽船も亦(また)道路なり。」

今から約九〇年前、十島村の村長になり、計三期務めた文園彰氏の功績をたえ、中之島に建立された石碑に金字で刻まれた言葉だ。同氏は喜

界島に生まれ、教師を夢見て鹿児島師範学校を優秀な成績で卒業し、喜界島で教職生活をスタートさせた。熱心な教育活動に加えて、不衛生だった井戸水を改善するため、先頭に立って、当時島唯一の水道施設の整備に尽力した。その功績が認められ、二十九歳の若さで校長に抜擢された。その後、東京や大阪の学校で教員として働きながら、自身も二つの大学に学生として通い、勉学に励んだ。そして、三十九歳で喜界島に戻ると同時に、島民から船舶の入出港が困難だった桟橋の改修工事の指揮を依頼された。

「困っている人々を見過(こ)せない。」と、爆破作業や潜水作業、危険な冬の荒波にもまれながら、先頭に立って工事を完成させた。

その後、四十二歳の若さで中之島尋常小学校の初代校長として赴任し、教育課程や学習環境の改善に取り組み、二年間で教育の基礎をつくり上げた。また、当時は借り受けた船が不定期に各島々を巡っていたため、年に数回だけ寄港することも珍しくなく、食料や薬品の不足によって、島民は命がけの生活を余儀なくされていた。「島の暮らしの利便性を向上させたい。」と考え、人々の待望論を受けて村長に就任し、定期船の建造予算や船舶運航の補助制度を獲得することができた。「自分たちの船」が初めて十島の島々に汽笛を鳴らしながら近づいてくるのを見て、島民は大きな拍手と万歳で出迎えたそうだ。

村の有人七島を結ぶ定期船は、現在も暮らしの生命線である。生活物資だけでなく、新天地での夢の実現や安息の地を求めて入島したり、島立ちしたりする人流も、船に託されている。その他、郵便制度や電話の開通にも貢献した。現在も必要不可欠なこれらの礎を築いた先人の苦勞に思いを馳せずにはいられない。

学校だけでなく、地域を巻き込んで、課題を解決してきた統率力と行動力、人望と熱意に敬意をばらうとともに、教育に携わる者として、次の世代に語り継ぐ責任を果たしていきたい。

## 五十歳過ぎたら

### 本気で夢を追え!

伊集院北中(日)

川端成實

「あなたは今夢がありますか？」

その夢は、自分の人生において本気で叶えたい夢ですか？」

五十歳を過ぎたある日、そう質問される機会があった。そして、それに続いて「死ぬまでに叶えたい一〇〇のこと」をリストアップし、五十歳を過ぎた後の人生と向き合ってから、自分の生き方が大きく変化したように思う。

特に、自分に変化を与えたものとして「力を引き出す信念をもつ」ということだ。

それまでも、自分の生き方のよりどころとなる言葉はあったが、この機会に得た考え方「信念」は、人生一〇〇年時代を見据えた生き方も踏まえて、自分を大きく変える原動力となった。その「力を引き出す信念」とは、次のようなものだ。

(人生を成功に導くマインド)

- ・ 人生は「できる、できない」ではなく、「やるか、やらないか」だ!
- ・ できないと思ったら? やらなければならぬ!
- ・ 誰もやらないことは? 私がやる!
- ・ 怖いことは? やってみる!

- ・ 断られたら? ますます燃える!
- ・ 失敗したら、やり方変えてあと九回!

(人生をより良く生きる「気付き」)

- ・ 自分に起こる全てのことは、自分がよくするために起こる

- ・ 人生最強の思考法「あえて楽しむ」
- ・ 人生の目的は「伝えること」である
- ・ 思考は現実化する
- ・ 全ての答えは自分の中にある
- ・ 自分の中の眠れる偉大な力を呼び覚ませ!

自分の中に潜んでいた「力を奪う信念」からの決別(封印した口癖「どうせ〜だから」「そんなことできるはずがない」「無理だ、諦める」「きっと嫌がられている」)を図り、五十歳からの夢実現に向けて、いま着実に歩みを進めている。

自分の人生において「本気で叶えたい夢」。夢に終わらせず「現実化」するためのステップをしっかりと歩むことができている自分を嬉しく思うとともに、その途上でどんな逆境が待ち受けていようと、そのこと自体を「楽しみ」、「全ては自分が良くなるためのこと」と柔軟性をもって受け止め、人生「やるか、やらないか」だという絶対的な確信をもったおかげで、昨夏は、大手出版社から念願の単著も出版することも得

きた。

人生一〇〇年時代を生きる「ポジティブライフ」。本気の夢実現に、皆様もチャレンジあれ!

## 先達から

### 受け継いだもの

川床中(北)

西元ひとみ

教員生活十年が終わり、三校目は沖永良部の和泊中学校に勤務した。十年間務めたというわずばかりの自負を抱いて

いた私にとって、教職を定年退職され当時町教育委員会の社会教育指導員をされていた先生との出会いは教師としての生き方を学ばせていただいた貴重な機会となった。教師は何を学び、何を子どもに教えるべきなのか、古き良き伝統に込められている日本人が大切にしてきたことなど、それまでの十年間の教員生活でほとんど考えることがなかった「教育の神髄」に触れた出会いであった。名詩名歌の暗唱を通して先達の思いや日本語の美しさに触れる活動、生徒に一役を担う誇りをもたせ環境整備への意識向上を目指した清掃・緑化活動の在り方、沖永良部の歴史と琉球・日本・世界との関わりと教育の繋がり、小原國芳先生の全人教育論等枚挙にいとまがない。三年間という短い期間であったが、

「教師は、学び続ける存在である。」ということ  
を温かく穏やかな口調で熱く深く教えていた  
だいた。

多くの教えの中で印象深かったのが、掃除用  
具の指導についてである。勤務された学校では  
入学時に新入生全員に一本の箒を配り、三年間  
その箒を使って掃除に取り組み指導を实践され  
ていた。「土間箒の使い方を幾とおり思い浮か  
べますか?」という問いから始まった。三年間  
丁寧に正しく使われた箒の穂先は短く整えら  
れ、三年生が三年間清掃に心を込めて取り組ん  
だ足跡として次年度新入生へ手渡された。先輩  
の箒から、清掃を通して心を磨き、一人の人間  
としてあるべき姿や中学生としての自覚を新入  
生に促すことに繋がったと話された。

管理職となり九年目を迎える今、教諭時代に  
比べ生徒と直接触れあう機会は少なくなつた  
が、今私が大切にしているのが清掃の時間であ  
る。わずかに十五分程度ではあるが、掃除の段取  
り・道具の使い方・一緒に作業する仲間との連  
携・働く喜び等を生徒の人となりを考慮しなが  
ら伝える「心磨き」の時間を私も楽しんでいき  
たい。

## 読書案内



■ハンス・ロスリング 著

## FACTFULNESS (ファクトフルネス)

中名小(市) 松原 葉子

校長として判断を求められる場面が多くあ  
る。複雑な状況や問題に対して、まず冷静に分  
析を行い、その結果や情報をもとに適切な選択  
をする。大切なのは、過程に信頼性とデータを  
持ち込み、常に学習と改善の姿勢をもつことだ  
である。そうと分かっている「本当にこの判断  
でよいのだろうか。」と、迷うことの連続である。  
こうしたとき、本書「ファクトフルネス」の考  
え方を活用することで、より自信をもって判断  
できるのではないだろうか。

本書は、私たちの世界観や認識が、どれだけ  
実際の事実から乖離しているかを気付かせてく  
れる。まずは、冒頭にある世界の事実に関する  
十三問のクイズに挑戦し、いくつ正解できるか  
試してほしい。チンパンジーの正解率は三十三  
%近くであり、多くの人がチンパンジーにすら  
勝てないという。それほど人々は、世界を誤解  
し、事実に基づいて(ファクトフルに)世界を  
見ることができていない。その理由は、誰もが  
もっている「分断本能」「ネガティブ本能」「パ  
ターン化本能」「焦り本能」など十の本能にあ  
る。この十の本能を抑えなければ、事実に基づ  
いて正しく世界を見ることができない。今ある  
世界を正しく認識できなければ、社会問題を解  
決することも、危機に対応することもできない。  
その十の本能とはどのようなものなのか、どう  
したらそれらの本能を抑えることができるのか  
を、本書から学ぶことができる。

事実や客観的なデータ、統計を基にした判断  
を重視するファクトフルネスの原則を取り入れ  
ることで、校長としての判断力がより客観的で  
効果的なものとなり、学校経営全体にポジティ  
ブな影響をもたらすのではないかと思えた一冊  
であった。

日経BP 一八〇〇円

■茂木健一郎 著

## 意思決定が9割よくなる

### 無意識の鍛え方

小瀬田小(熊) 平原 利 郎

本年七月に著者の茂木さんとご縁があり、本校で児童や地域の方に蝶や昆虫等についての講演をしていただいた。幼少期から蝶が好きということもあり、児童にもとても分かりやすい話をされた。また、校長室で屋久島の魅力等についてもお話することもできた。

この本を選んだ最大の理由は「はじめに」の冒頭「自分のことを実はそれほどわかっていない」の一文に引き込まれたからである。物理的には鏡を見れば自分が見えるが、脳が処理をして実際よりもよりよく補正されているのを見ているらしい。また、行動の約九割は無意識で行われているという。確かに「自宅の玄関を右手で開けて…」と意識することはない。思考パターンや習慣により、意識せずに無意識で行動しているのである。しかし、脳内では「右手を八十度前に出して、軽く握って右に回して…」と決定付けているのである。

また、行動だけでなく、思考にも無意識は大きく影響しているという。例えば、自分のことを「もうこんなに歳をとった。」と思うか、「まだまだこれからだ。」と思うかの思考を決定するのは無意識らしく、本人にはその自覚がないという。ポジティブ思考かネガティブ思考かでとらえるのは、無意識による選択ということにも驚かされた。

自分の思考の傾向を無意識から意識化することで、日々の言動や人間関係、人生そのものを大きく変えられると茂木氏は著述している。無意識を鍛える方法についてはいくつか具体的に述べられているが、キーワードの一つは集中力の強化であろう。私は屋久島の魅力である山々の登山や屋久杉の破片を磨くことなどで集中力を高めていきたい。

無意識を意識して、それを鍛え集中力を高めることで、無意識がつかさどる習慣や思考のあり方等をアップデートしていきたいと思う一冊であった。

株式会社KADOKAWA 一五四〇円



■坂本龍一 著

## 音楽は自由にする

上城小(大) 川 畑 めぐみ

令和五年一月に Ryuchi Sakamoto : Playing the piano 2022 がテレビ放送された。十二月中旬に配信もされていたようだが、関連番組もいくつか放送され、闘病しながら音楽を「日記を書くように」作り続ける姿が映し出された。「この人はもうすぐ亡くなってしまおう」という予感に涙しながら見入った。久しぶりに彼のピアノのCDを購入し、車で聴いた。四月二日、夜のニュースで、三月末に亡くなったことが報じられた。その時にもまだ、私の車は彼のピアノの演奏が流れ、喪失感を感じる日々が続いた。新学期が落ち着いた五月の連休に、彼の音楽の源泉をもっと知りたいと、この本を手にした。

「教授」「世界のサカモト」と呼ばれ、先進的な音楽家・芸術家として世界的な名声を得て、ニューヨークで暮らし、環境問題への関心が高い人というイメージから、意識の高い、華やかできらびやかな人生を予想した。実際は、文化的には恵まれた環境で育ってはいるが、学生運



動の屈折や、曲を締切りまでに作るための過酷な作業や、準備した曲の半分しか使われない落胆などと、折り合いをつけていく姿が書かれていた。

そんな彼が、幼少期に「何かになりたいと思ったことはない。」と書いていることに驚いた。美しい音と音楽を作ることには夢中になる姿との距離を感じた。成行きのようだが、彼の才能を見つけた人が道をつけ、紆余曲折があつたにしろ他の選択肢を選ばずに、音楽を作ることを日常にして生きたのではないか。「なりたいたい」と言語化しなくとも自然と音楽に親しみ、周囲も彼のスキルと感性を必要としていたことで、音楽家という生き方になつたのではないかと。

最後の章では、音楽業界の成功の難しさも述べ、新たなメディアに対応しつつ、よい音楽を作り聴衆に届けたいと締めくくっている。そして、実際に、闘病しながら、コンサートに代わる録画配信での演奏会を実現して、人生を締めくくった。坂本龍一の音楽は、いつまでも私の憧れとして在り続けるだろう。

本書は二〇〇九年までの自伝であるので、彼の後半生を綴った自伝も、彼の残した曲とともに、これから味わっていききたい。

新潮文庫 一〇〇〇円

■ 沢渡あまね 著

うちの職場がムリすぎる。

甲東中(市)村 上 勝 美

初めて校長職に就いたとき、中堅どころと言われる職員を中心に徹底した指導が行われるのを見て頼もしく感じた。これまでの学校の実態に合わせて、学習指導や生徒指導の場面で、最適化された指導であることは容易に理解できたからである。その後も指導を継続することにより、生徒はよりよく成長し、卒業・入学による生徒の入れ替わりによって実態も徐々に変わっていった。実態の変化に合わせて、その指導も変わるものだと考えたが、意外にも、それまでの成功体験から脱却することの難しさを感じるようになった。その学校に長く勤めた職員ほど、以前の厳しい状況へ逆戻りする不安感・危機感が強い印象を受けた。正しいかということは別にして、少しでも変化をと考え、職員一人一人と事あるごとに語ったのを覚えている。

本書は、組織の活性化に向けたヒントを得ることのできる一冊である。「組織カルチャー」「思考能力」「評価・人事制度」「コミュニケーション

ン」「管理・間接業務」「社会構造・通念」の六つの章からなり、テーマごとに考えられる問題点をあげ、その解決策を示すという構成になっている。

「旧態依然とした組織カルチャーをどうする？」というテーマでは、世の中の常識や考え方が変わっているにもかかわらず、「過去の成功体験への執着」に頼る組織や特定の組織の中しか通用しない「井の中の蛙」のような考え方を問題点として、「全体を変えるために、まず自分の周りから変えていく」や「自分自身が思い切つて新しい行動に出る」など解決策を示す形でまとめられている。

内容的には学校を想定したものではないため、読み流す部分も多いが、新たな視点にも気付くこともあり、気分転換の一冊としてどうぞ。

すばる社 一六五〇円



校長として最後の年に、「鹿児島教育」の原稿執筆依頼、それも執筆項目が「趣味・文芸」ときた。さて、これは困った。私は自他ともに認める飽き性である。ひよっとすると「超」が付くかもしれない。リフレミニング的に言えば、「好奇心旺盛」といえるかもしれないが、熱しやすく冷めやすい。流行り物にもすぐ飛びつくが、長続きはしない。これまでも、料理、ゴルフ、テニス、ガーデニング等、いろいろとやってみてはみたが、どれもテゲテゲで終わっている。それでも、無理やり挙げると言われれば、恥ずかしながら「音楽」だろうか。

私が、一回り離れた兄が買ってきたフォークギターと出会ったのが小学校六年生の時だった。今思えば、兄も飽きっぽい性格だったのであろう。すぐに放置されてしまったそのギターで最初に練習して弾いたのが、確かフォー・セインツというフォークグループの「小さな日記」という曲だった。なぜその曲だったのかといえは、たぶん兄が練習していたギター譜があり、そして、何よりコード進行が簡単だったからだと思う。その時は、この歌詞が恋人の死を歌った悲しい内容だったということは今も知らなかった。当時は、吉田拓郎、井上陽水、長瀬剛や中島みゆきなどギターの弾き語りや歌うアーティストたちが群雄割拠の時代であった。「自分もかっこよくギター弾いてみたい」と思い、自己流で、兄が買ってくれた教則本を見ながら、夜な夜な自分の部屋でスチール弦をかき鳴らした。誰もがぶつかると「Fコードの壁」も何とか乗り越え、いろいろな曲

### 趣味・文芸

## 音楽でつながる

が弾けるようになった。普通ならそこで、ギターをもっと極めようと思うのだが、生来の飽き性の私は、ほかの楽器もやりたくなくなってしまった。キーボード、ベース、ドラム、中学校では野球部でありながら吹奏楽部にも籍を置き、サクソフォンも吹いていた。結果的にはどれも「一応できる」というレベルから上達しないのである。無謀にも高校時代には仲間とバンドを組んで、文化祭に出ようということになった。私の担当はドラム。独学で練習し、本番では、吉田拓郎や甲斐バンドの曲を演奏した。今思うと、怖いもの知らずで冷や汗ものだが、とても楽しい青春の一コマである。

大学でも音楽系のサークルに入り、ハワイアンやラテン音楽、おまけにクラシックギターまでかじるといって、まさに私らしい関わり方で、相変わらず一つのことを極めることはなかった。

教員になってからは、この音楽が様々な場面で人と人を深く結び付ける役割を果たしてくれたと感じている。

教諭時代は、同僚たちと教員バンドを結成し、地域の文化祭や夏祭り、金管バンドのコンサートなどで演奏をさせてもらった。同僚の結婚式の新郎新婦入場で生バンドで演奏したこともあった。また、「おやじバンド」と共演すること

向陽小(市) 喜岡 達也

もあり、子どもたちや保護者、地域の皆さんと一緒に楽しむことができ、地域連携のお手伝いになったのではないかと思っている。四年間の日本人学校勤務では、更に音楽を通して文化や言語を超えて、多くの人と深く結び付くことができたのではないかと思っている。特に印象深かったのは、文化祭のフィナーレで、招待した現地校の子どもたちや先生方も含めて千人を超える全員で、「We Are The World」を大合唱したことだ。「音楽は国境を超える」とはこういうことなんだと、ステージ上で鳥肌が立つほど感動しながら、ドラムを叩いたことを今でも覚えている。

校長になってからも、金管バンドの卒業コンサートで、「シング・シング・シング」を子どもたちと一緒に演奏させてもらった。本番はもとより、子どもたちと練習した数日間が、授業中には見られない子どもたちの様子や担当教諭の情熱に触れることができ、貴重な時間となった。何より、一つの曲を共に演奏するということが一体感を生むことになり、日頃は若干遠いかなと感じる子どもたちとの距離感が近付いた感じがした。肝心の本番はちょっとしたミスもありつつ、それも含めて十分に楽しい演奏であった。

技術的には到底自慢できるものではない音楽という趣味だが、そのおかげで楽しく充実した教員生活を送り、心身の健康と幸福感を高める一助となった。

いつかまたどこかで、楽しく演奏する機会があればと思っている。



## 「誠の島」に根づく人づくり

与論中(大) 徳 重 正 宏

## 一 与論島の概要

与論島は本県最南端に位置し、東に太平洋、西に東シナ海の四面を黒潮に抱かれ、エンゼルフィッシュの形をした周囲二十三kmの珊瑚礁からなる島である。その自然の美しさは、「東洋の海に浮かび輝く一個の真珠」と讃えられ、多くの観光客でにぎわう観光の島である。地勢は琉球石灰岩からなる低平な段丘状の地形で、最高標高は、島の南側にある琴平神社の北方で九十七・一mとなる。

## 二 与論十五夜踊り

この与論島に脈々と伝えられた「与論十五夜踊り」は、「島中安穩・五穀豊穡」を祈る祭事で、旧暦三月・八月・十月の十五夜に神前に奉納される芸能である。

伝説によると、踊りの起源は永祿四年（一五六一年）、当時の与論領主が三人の息子を島内・琉球・大和に遣わして各地の芸能を学ばせ、一つの芸能にまとめあげたものといわれている。この言い伝えを裏付けるように、十五夜踊りには各地の芸能の特色が混じりあって残っており、文化交流を偲ばせる非常に珍しい芸能であり、国の重要無形民俗文化財

に指定されている。



踊り手は「一番組」と「二番組」に分かれ双方が交互に踊りを奉納していき、「二番組」は寸劇仕立ての踊りを披露する。ただし台詞はすべて与論の古い方言で、竹と紙で作った大きな仮面を用いるのが特徴である。特に豪傑役がかぶる巨大な面は衝撃的な造形となっている。一方の「二番組」は集団で手踊り・扇踊りを披露する。恋や自然を謳いあげた唄は優雅で美しく、こちらは「シユパ」という頭巾をかぶって踊る。一番組・二番組とも踊り手は男性のみで、かつては世襲で受け継がれてきた。

明治時代に数年間踊りを中断したところ、疫病・天災が続いたために復活した。その後は現在に至るまで（コロナ禍でも）途切れることなく続いており、十五夜踊りは、まさに神への祈りとして生き続けている。

## 三 与論の歴史の一つ

明治三十一年七月に島を襲った台風で与論は壊滅の危機に陥り、島民の一部は移住を余儀なくされ、翌年二月に新天地を求め、炭鉱の積出港であった口之津（長崎）に集団移住をした。口之津移住から十一年経った明治四十三年、三池港開港に伴い、与論島の人々は口之津から大牟田の三池（福岡）へ再移住し



ている。移住先での言葉や習慣の違いにより、不当な労働条件、厳しい生活環境等の差別を受けながらも、与論島の人々は、子供たちのために互いに助け合い、励まし合って生活し、三池炭鉱を支えた。与論で培った逞しい力や優しい心は、移住から百年以上経った今も、大牟田与論会の子孫の方々にユンヌンチユの「誠の心」として教えられている。

与論中学校は、今年度四年ぶりに修学旅行で大牟田を訪れ、与論会や地元の中学生と交流し、郷土与論へのあふれる思いや与論の風土のよさを伺う機会を得た。

## 四 海洋教育と「島だち」の教育

与論町は「島だちの教育」を理念として掲げ、「島発ち」「島建ち」「島立ち」の三点を包含するものとして大切にしている。その理念は、島を出発するまでに島を知り、島を建設・創造するために問題解決力を育み、どこでも自立できるための人間性等を身に付けるためのものである。本町はこれらの力を身に付けさせるために、令和四年度から、与論島の海とくらしの課題について探究する海洋教育科「ゆんぬ学」を小・中学校に設置し、与論高校の総合的な探究の時間「ゆんぬ」に接続するカリキュラムを構築している。与論島では、このカリキュラムによって、地域と連携した協働的な探究学習が町ぐるみで推進されており、愛郷心の醸成につながる新たな教育が始まっているところである。

## 連合校長協会広報部より

「師の道」の原稿依頼等の時期変更について

「師の道」について、役職定年になる六〇歳の校長先生方に今後も原稿依頼をしていくというお知らせを本刊八月号でしたところですが、教員の定年制度が大きく変更されるこのタイミングで、原稿依頼・締め切りの時期を次のように変更していきますので、お知らせします。

【令和五年度末に校長を終える先生方】

原稿依頼・・・令和五年十二月上旬

原稿締め切り・・・令和六年三月末

発刊予定・・・令和六年九月

【令和六年度末に校長を終える先生方】

原稿依頼・・・令和六年五月上旬

原稿締め切り・・・令和六年八月末

発刊予定・・・令和七年二月

令和七年度以降も令和六年度末に校長を終える先生方と同じ時期に原稿依頼等をしていきます。

令和五年度の移行期を経て、令和六年度から校長職最後の年に執筆していただき、校長職のうちに冊子をお届けするサイクルに変更していきます。御理解・御協力をよろしくお願ひします。

【お詫び】

本刊九月号「随想」に誤植がありました。お詫びして訂正します。

蓄電池 ↓蓄電池

畜エネ化 ↓蓄エネ化

一般財団法人校長会館だより

○新任 令和五年十月一日付

与論町 中山 義和 氏

(前鹿児島市立名山小学校長)

季節の言葉 「神無月」  
かんなづき

道はたや 鳥居倒れて 神無月

正岡子規

宗任に 水仙見せよ 神無月

与謝蕪村



## 編集後記



本年度、県校長協会の広報常任部員の打診をいただき、六か月が経とうとしています。受諾したものの、「校長会館ってどこにあるの」「会費を納めているけれどそもそもどんな活動をしているの」「一般財団法人とあるけれどどんな意味」など、会館・広報部に足を踏み入れるまでは、疑問符だらけでした。しかし、部長をはじめ部員の方々が指示してくださったことで謎を解くことができています。

私の編集担当コーナーは「ある日の校長講話」です。全校朝会や行事等で児童生徒、教職員に対し、自分の思いや考えをどのようにすればわかりやすく伝えられるのか、ご苦労が読み取れます。拝読すると、「この講話、使えそう」「話の組み立て方が面白い」など、参考になつていきます。

また、十一月に発行予定の「師の道」では、校長職を退いた諸先輩方が教員生活を振り返り、嬉しかったこと、辛かったこと、後悔したことなどを綴っておられます。多くの方々は、子どもたちや同僚、地域の方々との出会いに感謝し、大切な思い出となっていました。定年引上げにより、多くの方々が、校長職を退いた後も職に就いています。後回しにしがちな私にとって、今のうちから少しずつネタの掘り起こしをし、執筆準備をしないと忙殺されるなど感じることで。

最後になりましたが、ご多用の折、玉稿をお寄せくださった校長先生方に感謝し、厚くお礼申し上げます。

中村宗義 (坂元小学校)